

最近の魚病発生状況とクロマグロの住血吸虫症について

長崎県総合水産試験場 環境養殖技術開発センター 養殖技術科

はじめに

養殖業者の皆様におかれましては、年末の出荷シーズンも終え、次の種苗導入に向けて準備をされていることと思います。また、今年の夏は例年になく水温が低い状況で、戸惑われた方も多いのではないのでしょうか。

夏の低水温の影響は不明ですが、平成21年12月末までの魚病診断件数は202件で、昨年より約30件少なくなっています。一方、本県の魚類養殖は、クロマグロ、マハタ等の新魚種や陸上養殖が多くなっており、発生する魚病は多様化しています。

今回は、最近の魚病発生状況とクロマグロの住血吸虫症についてご紹介します。

従来、住血吸虫症は血管内吸虫症と呼ばれていましたが、昨年秋の魚病学会で住血吸虫症と呼ぶように提唱されています。

最近の魚病発生状況

ブリでは、レンサ球菌症、ノカルジア症、類結節症、住血吸虫症、細菌性溶血性黄疸等が確認されました。なお、昨年度に数件確認されたワクチン接種ブリのレンサ球菌症については、今年度接種群での発生は確認されていません。

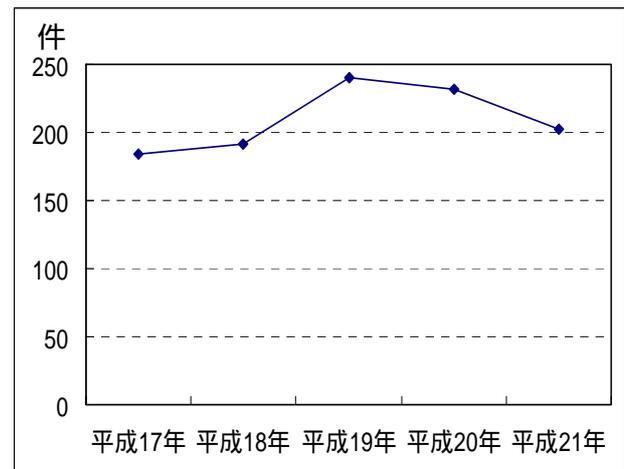
トラフグでは、シュードカリグス症の被害が拡大しているようです。また、粘液胞子虫性やせ病、ヘテロボツリウム(エラムシ)症の被害も多いようです。

マダイでは、エドワジエラ症の発生が依然として多い状況です。その他、マダイでは聞きな

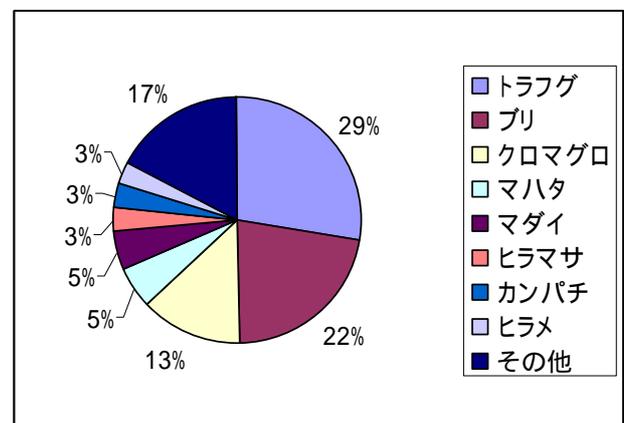
れない方も多いと思いますが、ベネデニア症(ハダムシ)の発生も確認されています。

ヒラメでは、レンサ球菌症(ストレプトコッカス・イニエ)等の発生が確認されました。クロマグロでは、住血吸虫症が多く、稚魚期にべこ病も確認されました。その他、脳粘液胞子虫や心臓クドアの寄生、脊椎骨の骨折によるへい死も多く確認されています。

ヒラメ、トラフグ等の陸上養殖では、スクーチカ症、白点病等の寄生虫が問題となっています。



最近5ヶ年の魚病診断件数



平成21年の魚種別魚病診断実績

クロマグロの住血吸虫症について

本県では、クロマグロの住血吸虫症は、平成15年に血管内吸虫症として確認されました。その後、毎年のように発生が確認されており、ここでは昨年確認した事例についてご紹介します。

昨年7月から9月に導入された群で、9月にへい死が確認されました。口や鰓蓋が開いた状態で死んでいる魚が多く、鰓には住血吸虫の卵が多数見られました。一部のへい死魚の心臓からは親虫も確認されました。このような状況から、大量の住血吸虫卵が鰓の血管を詰まらせた結果、魚が死に至ったものと考えられました。

一般に寄生虫症の対策としては、原因寄生虫の生活環を遮断する方法が有効です。しかし、クロマグロ住血吸虫の生活環は残念ながら未だ解明されていません。

その他の対策として、実験的にはプラジクアンテルの投与で親虫を駆虫できることが確認されています。しかし、プラジクアンテルはクロマグロを含むスズキ目魚類へ投与できるものの、適応症が「ハダムシ症（ベネデニア・セリオレ）」となっています。そのため、緊急を要する場合に限り、獣医師の処方により使用規制省令の範囲内で使用する以外は認められていないので注意が必要です。



へい死したクロマグロの鰓



へい死魚の鰓に見られた住血吸虫の卵

おわりに

今回紹介しましたように、近年、新たな魚病が確認されています。

さらに、消費者の安全・安心に対する意識の高まり等から、養殖業者の皆様には、これまで以上に水産用医薬品の適正使用に十分留意していただく必要があります。

総合水産試験場では、新たな水産用医薬品の承認に向けた取り組みを行うとともに、魚病の診断や防除対策等魚病全般に対する相談を随時受け付けております。

投薬等が必要と思われる魚病が発生した時は、適切な対策を取るためにも、最寄りの水産業普及指導センターか水産試験場養殖技術科（095 850 6319）までご連絡ください。

（研究員 松倉 一樹）